
夕闇のなく頃に

黒騎士06

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕闇のなく頃に

【Nコード】

N5300Z

【作者名】

黒騎士06

【あらすじ】

中学2年生の僕は普通の生活に飽き飽きしていた。そんな時、転校生がやってきて・・・

第一章 前編

第一章 おぼろ月 前編

「な、なんだここは・・・海？」

ここは夢の中なのだろうか、ひどく穏やかな気分だ。空の満月が寂しく照りつける中、俺は砂浜に立っていた。夕日が水平線に沈んでいく中、誰かの泣き声が聞こえてきた。

「誰か居るのか！」

返事はなく泣き声だけが延々と響き渡ってくる。制服のスラックスが濡れていて肌が少し痒い。そして頭の上になにかがポツリ・・・ポツリ・・・と当たってきた。雨だろうか、ふと頭の上に手を当てるとなぜか嫌な感触がした、その手をゆっくり・・・ゆっくり・・・降ろすと手は真っ赤に染まっていた。

2

「ぎゃあああああああああ！！！！」

その瞬間、僕は夢から目覚めた。体が鉛のように重く汗が体中から滲み出ていた。目覚まし時計が虚しく鳴っている。窓から入ってくる光が目障りで仕方がない。僕はベットから静かに降りて二階のリビングへと向かった。リビングには誰もいなかったためコタツの上にあるリモコンを手に取りテレビの電源を入れた。

テレビ画面の左上には【5：17】と表示されていた。

後編へ続く

第一章 後編

第一章 後編

確かに、こんな朝早くに誰も起きてないなんて当たり前だ、僕は冷蔵庫から牛乳を取り出してそのまま口につけて飲んだ。その時ポケットの中に入っていた携帯のなかにメールが受信されてきた。メールはクラスメイトで同じ放送部の石原賢からだった。

【5:18 from:石原 to:北川 re:無題 今何やってる?こつち暇すぎて死ぬゝあつ、あと今日転校生が来るらしいぜ朝のホームルームで紹介されんだってよ、放送室に7:30集合な!】

朝っぱから迷惑なやつだ。僕が制服を身にまとい学校の予習を済ませた頃にはテレビの時計は7:00になっていた。一階から母が登ってきて朝飯の用意をした。僕は食事を済ませると学校の放送室に向かった。放送室には石原の他に二人の部員がいた。両方共クラスメイトで同じく放送部の相川裕人とゆういつの女子部員の九城七実がいた。

「おおつ来たな、お前が来るの待ってたんだぞ!」

石原はいつもこんな口調で話しかけるから毎日耳が痛くなる。

「なんだよこんな朝早くから・・・」

「『なんだよ』はないだろ放送部の部員は俺を含めて四人しかいないんだぜこのままだと来年で廃部になっちまうだろ、そこで今日来

る転校生を放送部に入部させるんだよ」

「それでそのことを話しあうためにここに集合させったってことか、」

「そう言うことで集まってもらったんだが、なんか意見ないのか？」

「あ、あの・・・」

「何だ九城、意見あるのか？」

「う、うん・・・その転校生に話しかける人って誰にするの・・・」

九城は石原と性格が逆でおとなしいやつだ。

「そつだな・・・よしじゃあ俺が行こう！」

「待てよ、石原お前じゃ勢いが強すぎてあいてにされねえって」

相川は超ドSな性格でいつも毒を吐いている。

「じゃあ誰が行くんだよ・・・」

「俺が行こうか？」

「だったら俺のほうがぜってえいいってなあ相川」

「お前よりはマシだよ、俺は北川でもいいと思つよ」

「わ、私も北川君がいいと思う・・・」

「・・・わ、わかったよじゃあ北川に決定な！」

僕らが話し終えたら放送室の時計の針は8：24を指していた。僕らは急いで2-2の教室へ向かった。

第一章 後編 【終】

第二章 転校生 前編

第二章 転校生 前編

僕らが教室についたときには僕ら以外の生徒は席についていた。

「遅いぞ、お前たち……って九城も、珍しいな」

この人が担任の板野で適当な教師。

「すみません、先生ちよつと会議していて遅れちゃいました」

石原はこう見えて放送部の部長だ。（ちなみに部長になりたいと言
い出したのは石原自身）

「まあいい席につけ」

僕らは言われるがまま席についた。

「ホームルームの前に転校生を紹介する。久保田美穂さんだ」

「久保田です。よろしくお願いします」

その声はとても美しくて容姿も可愛い。ショートのに美しい瑠璃
色の瞳をしていた。

「じゃあ後ろの席、北川の隣に座りなさい」

久保田は軽く『はい』と返し僕の隣に座った。

「久保田美穂です。よろしくね、えつと・・・北川君だったけ？」

「は、はい・・・よろしくお願ひします」

前の席から石原が口パクで「放送部に誘え今なら大チャンスだ！
つと言ってきた。僕も口パクで「了解」と返した。

「あ、あのう・・・」

「なに北川君？」

「いきなりこんな事言うのもあれなんだけど、放送部に入らない？」

「放送部？」

「はい・・・実は部員が足りなくて来年で廃部になるかもしれないから、それに二年だけの部活だし・・・」

「いいわよ、私中1の時に放送部入ってたから、それにそういう部活があつたら入る気だったし」

意外とあっさり入部が決まってしまった。

「入部届の紙は先生から貰ってあるから今日中に出しておくわ」

第二章 転校生 後編

第二章 転校生 後編

その日の放課後、放送室で久保田に機械の使い方相川が教えていた。放送部の中で一番機械に詳しいのは相川だ。石原は部長だがあくまで形だけだ。久保田は相川の説明を興味深く聞いていた。

「このマイクは集会とかで使うマイクで、こっちは……」

「取材用のマイク、でしょ」

久保田は昔放送部だったためか機械に詳しくかった。

「く、久保田さん詳しいんですね……」

「九城さんだっけ、私、前放送部だったからちょっと知ってるの」

「あっ、そうでしたね……」

「えっマジで！俺そのこと知らなかった、相川お前知ってたのか」

「ああ、俺は北川から聞いたけど、石原は聞いてなかったのか？」

「……おい北川！俺そのこと聞いてねえぞ！」

石原は仲間外れにされたと思うと積極的に話に入ろうとする。

「わりい忘れてた」

「まあ、いいけどよ・・・そういう事は部長である俺に真つ先に言うべきだろ！」

「今度から気をつけるよ」

こういう時の石原を慰めるのは本当に大変だ。(これが日常茶飯事だ)

「あつ、そういうえば久保田さんってどこに住んでるの？」

「あなたと同じマンションだけど・・・北川くん知らなかったの？」

僕は驚いた。最近引っ越してきた人がいるとは聞いていたが、まさかそれが久保田とは思わなかった。しかも同じ四階に住んでいるというのだから驚きだ。

第二章 転校生 後編 【終】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5300z/>

夕闇のなく頃に

2011年12月23日23時52分発行